

某大学が JST と JICA からの資金で行っている海外での研究プロジェクトにメンバーとして加わったのだが、このプロジェクトが目も当てられないほどにお粗末なものだった。地球規模の課題解決のための国際協力や途上国の科学技術の振興は大切なことだし、そのために外務省と文科省が協力することも悪いことではない。しかし、その実態は最悪である。

以下約 100 行削除（プロジェクトの問題点を具体的に書いたのだが、それを書くと、誰がやっているプロジェクトだかわかってしまう。実際、端にも棒にもかからないほどにひどいので仕方がないという意見もありそうだが、事実とは言え、相手が反論できないところで攻撃的に批判することは人格を問われる行為だろう。控えめに書くという方法もないことはないが、腹が立っているの、ついつい攻撃的になってしまったので削除。）

課題の妥当性

課題を具体的に書くわけにはいかないが、ある程度内容の想像がつく範囲で曖昧に書くと、地球規模の環境問題である。地球規模の環境問題の解決のために途上国の専門家の技量を高めることが謳われている。その内容は、リモートセンシングやモデリングが主だ。もちろん、地球規模で物を考えるときに、モデリングやリモートセンシングは有効な技術だ。だがこれは、そういう立場にいる人たちの「科学」だ。所詮、いろいろな情報をかき集めてきて、それらを集約しているに過ぎない。集約においては、情報は取捨選択されるが、それは先進国の視点で取捨選択される。一方、途上国の現実はどうなっているか、沿岸体の地形の多くは複雑で、様々な環境がある。そこに地域の資源が存在し、それらを利用して人々が暮らしている。地域によっては、開発によってそれらの環境が破壊されて資源が急速に減少しているところもあれば、資源の過剰利用が資源の枯渇や環境破壊を招いているところもある。その一方で、いまだに豊かな自然環境が保たれているところもある。比較的環境が一様で、種組成も単純な高緯度地方では、広域に分布する資源量の大きな個体群が資本漁業の対象となっているために、資源状態の把握は容易だ。しかし、途上国の多くが存在する熱帯地方の沿岸では、環境の多様性も種の多様性も高く、比較的小さな個体群がローカルな水産資源として零細な多数の漁業者（場合によっては漁業者とは言えない一般の人も含む）に利用されている。こうした地域で、環境や資源状態をモニタリングすることは人手と費用が掛かる。実際、多くの途上国では、沿岸環境や資源のモニタリングはされていない。できないのである。管理人が道楽でフィリピンの田舎の大学に入り浸っているのは、この地域の沿岸環境と資源情報のモニタリングシステムを作るためなのであるが、道は遠く、いまだに採水器や、プランクトンネット、簡単な測器等をどうやって手に入れるのか頭を悩ませている。これが現実だ。

JICA の援助は要請主義で、現地からの要請がなければ、プロジェクトが採択されない。これには裏があって、政治的に現地の人間を使って、日本人が自分たちの課題を養成課題と

して挙げさせることはよくあることだ。内容をしっかり吟味しなければならない。課題設定において、こうしたことが十分に議論されたとは、管理人にはとても思えない。

研究者の意識

このプロジェクトに限らず、日本人の研究者と話していると。時々、「海外調査の研究申請では、実績がないと採択されない。これでは、新しい研究ができない。」というような不満を聞く。まともな意見のように思える。しかし、しかし、その新しい研究の必要性を感じているのは、そう発言した人であって、対象国、特に途上国の人ではない。もし、途上国の人がそのような必要を感じているのならば、そのような人を見つけ出して、連携をつくれればよいだけのことである。その努力なしに、自分が価値あると思っているものを、他者が評価しないと怒るのは傲慢だ。管理人は、JICA-JST のプログラムの申請者になったことはないが、科研費の海外調査の基盤研究はいくつかやってきた。最初のプロジェクトは、すでに現地のプロジェクトの実績がある研究者に参加してもらい、現地の研究者との関係を構築して、現地のニーズを把握したうえで行った。そして少しずつ関係を広げていった。当たり前のことである。研究の内容についてだけでなく、プロジェクトの実施上の手続、安全性の担保などを考えると、現地の研究者との密接な関係を前提にしないと、海外調査などできるはずがない。今回の、プロジェクトリーダーには、現地側の研究者の立場や都合に対する配慮は一切感じられなかった。一方、現地側の研究者の一人は明らかに不満を感じているようだった。それを感じ取れないような人間は、海外調査のリーダーになるべきではない。

ひも付き援助

課題の設定や研究者の研究動機に問題があったとしても、かなりの予算を投じたプロジェクトが5年間も行われたのだから、それなりの成果はあったはずである。いったい、その成果はどこに行ったのか。相手国側の研究者のキャパシティービルディングはできていない。相手国に十分な研究機材もそろっていない。途上国側の研究者と連名でいくつかの国際雑誌の論文を発表して、これを実績とすることはよくやる。連名になっていたとしても、実質、研究内容にどこまで加わったのかは怪しい。計画や分析の議論に加わらなくても、下働きをした見返りとして、連名に加えることはよくある。また、論文を自分で書き、筆頭著者になっていたとしても、その内容の本質的な部分を筆頭著者が作っていたかどうかはわからない。こういうことは、いくらでもごまかしが効く。むしろ、現地の研究者のニーズを出発点に、真面目に議論しながら、共同で研究を進めた成果というのは、一流の国際誌には受理されないことが多いのだ。国際誌の査読者の多くは、途上国のニーズを理解できないからだ。

おそらく、その成果のほとんどは日本側の研究者が手にしたのだろう。国際的一流紙での論文の掲載という実績、研究設備、研究室の大学院生の教育等々。むしろ、最初かこちらが目的だ。これは開発学でいうところのひも付き援助だ。生活向上など、途上国支援を目的に税

金が投入されプロジェクトが行われる。しかし、その実態は、途上国の生活や研究能力の向上などには結びつかず。それにかかわった日本の企業の利益となって吸い込まれただけだというのが、ひも付き援助だ。この場合は、研究なのだが、使われた税金で、誰が利益を手にしたのかを分析するとよく見えてくる。

プロジェクト評価

このプロジェクトは、先行する5年間のプロジェクトの後継プロジェクトである。先行プロジェクトは、その成果の評価が正式な手続きで行われているはずだ。先行プロジェクトから参加したメンバーに訊いても、高い評価を得たと言っていた。評価する評価員の能力が低いのである。彼らの能力の低さは、以前から指摘されていたことだから、今更驚くこともないが、一体、何を見ているのか。

長期的な視野に立ってプロジェクトの評価をすることは確かに難しい。だが、この場合はやりようがあった。まず、いつ頃、何に予算が使われたのかをしっかりと見ることだ。このプロジェクトでは、最後になって、容量が大きく計算速度の速いコンピューターが現地の研究機関にばらまかれた。こういうのはよくある。知り合いの水産関係の専門家から養殖普及のプロジェクトへの参加を打診されたときのことである。現地の養殖普及は結構大変だと思うと正直に言ったところ。心配しなくてよい。もしうまくいかなかったら、プロジェクトの終わりごろに養殖池をたくさん作って水をはっておけば、評価に来るのは素人だから、池の数しかわからない。数だけ用意すれば大丈夫だと言った。もちろん、冗談なのだが、冗談の中に、JICAの事後評価の専門家に専門的な実力がないという認識と不満を滲ませていた。プロジェクトの終わりになって、基本的なツールに大きな金が使われている場合、何かをごまかしていると考えべきなのだ。コンピューターを使ったメガデータの分析が必要ならば、トレーニングも含めて、プロジェクトの最初から必要な機材が揃えられなければおかしいだろう。プロジェクトが行われれば、当然、中間、最終の成果発表が行われる。現地の研究者による発表もあるはずだ。その成果をしっかりと聞けば、彼らがプロジェクトの中でどんな役割を担ったのかがわかるだろう。連名の発表もあるだろうが、一体その中で彼らの役割が何だったのかまで聞けばよい。専門的でわからないなどと投げ出してはいけない。JICAができないのであれば、それができる専門家にその部分を聞き出してもらえばよい。

プロジェクトで何人の留学生に学位を取らせたか、科学論文をいくつ書いたか、どのくらいマスコミに取り上げられたかなど、客観的・定量的な評価基準として使われる。実はこういうことはいくらでもつじつま合わせができるどうでも良いことなのだ。たとえば、学位を取った留学生はどんな内容の研究を行ったのか、その研究内容とプロジェクトの関係はどのようなになっているのか、全体計画との関係を詳細に読み解かなくてはならない。

評価の仕方を考えるべき時だ。必要なのは評価の評価だ。これは、具体的に事例研究的にやるしかないだろう。もうJICAも長い実績を持つ。評価だってそれなりの蓄積があるだろう

う。様々な記録から、個々のプロジェクトの実態、その評価、さらに、プロジェクト終了後、10年、20年後の out comes がどのようになっているか、事例研究をすべきなのだ。その中で、妥当な評価とそうでない評価が区別されてくるだろう。

改善提案

実際には、海外調査も援助もうまくいかないことが多い。そんなに簡単にうまくいくのなら、地球上のすべての問題はとっくに解決しているはずだ。批判するのは簡単だ。やらなければならないのは、どうやったら少しでも良くなるかを考えることだ。

「ひも付き援助」批判は、かつて、日本の海外援助に対する批判としてよくあった。JICA は「ひも付き援助」批判には敏感だ。避けなければならないと思っている。しかし、JICA は自然科学が苦手だ。JICA の協力事業には農学・工学がかかわっている事業もあるのだから、JICA は自然科学がわからないはずがないだろうと思うかもしれない。だが、そうした事業を直接行っているのは JICA 職員ではない。実際 JICA プロジェクトで働いているのは開発コンサルタント会社の社員のような、いわゆる専門家だ。プロジェクトごとに JICA に雇用される下請けだ。私には、JICA 職員が彼らをリスペクトしているようには思えない。その一方で公的な権威には弱い。JICA は専門的な部分の評価を JST に丸投げしたのだろう。JST にはひも付き援助が問題だという意識は希薄だ。科学研究としての評価には敏感だ。だが、その研究評価がどのようなものかと言えば、いわゆる先端志向で、一流紙に採択されたとか、引用回数がどのくらいとか、今、我が国の平均的な研究者が持っている研究評価基準と変わらない。そのような評価基準と、途上国の現実との乖離を意識することは少ないだろう。管理人は、途上国を舞台に世界的な先端研究をすることは可能だと思っているが、実際、それができるやはり人間はまれだろうし、それには多くの試行錯誤と失敗が必要だ。JICA と JST には違う判断基準がある。最初から比較の舞台が違っている。この隙間について、今回のようなプロジェクト採択され見当はずれな評価が生まれる。

課題の採択についていえば、外務省などを中心に、外交的・政治的側面での我が国の立場で取るべき戦略というのがあるのだと思う。後発先進国・非欧米的先進国という我が国が置かれた特殊な立場がその戦略の基盤にある。先進国の立場から途上国を説得し、時には途上国を代表して、先進国に物申すという立場である。この立場にある国はわが国しかないのだから、それ自体悪いことではない。途上国を援助して、途上国と一体になりながら、先進国が主張する地球規模での環境問題を解決するというポジションはありそうだ。だが、実際それをどのように実行するかは難しい。もう少し慎重な立場をとるべきだ。現代の科学がどういうものか本質的な理解が必要だ。地球温暖化問題を、従来の科学の延長でとらえるのは危ない。これは、地球温暖化の主張が間違っているという意味ではない。不確実性と科学的な真実に対する考え方の違いである。たとえば、従来の科学で使われていた分散分析では、多くの場合間違っている可能性が5%以上あれば、その説は正しくない可能性があると考え

る。一方、巨大地震や地球規模での災害の発生などは、被害が重大であっては困る。だから、その予測が間違っている可能性が 50%以上とかなり高くても、その対策やシミュレーションをしなくてはならない。その分だけ、似非科学が入り込む空間が大きいのだ。似非科学を排除しようとして、必要な警告を無視してはいけない。そこに、モデリングやシミュレーションなど、占いまがいの科学の存在理由がある。どんな占いでも、良く当たる占い師は尊敬される。それでよい。しかし、貧困など途上国が抱える社会問題は、今現実には起きている問題だ。のっぴきならない今の問題の解決と、将来の可能性に対する不安を天秤にかけてもらっても困るという主張にはそれなりの説得力がある。

管理人は、今でも「怪傑ハリマオの歌」は大好きだ。東南アジアで仕事をするときは、時々、口ずさんでいる。非道な欧米列強や中国資本の支配に、匪賊となって一人立ち向かおうとする谷裕の物語には涙が出る。(しかし、よくあんなラジオ番組を JHQ は放送禁止にしなかったものだと思う。多分あれが象徴しているものが何かまで気が付かなかったのだろう)。管理人の個人的な思いは別にして、反欧米愛国にしても、社会主義的反欧米にしても、さらにはイスラム原理主義にしても、現状に対するある種の不満、情緒が、こうした政治的主張の基盤にあるのだということ意識しておかなければ、外交戦略を間違える。欧米先進国が地球温暖化対策を主張するから、我が国の立場から、途上国に技術援助を行おうなどという、薄っぺらな考えではいけない。

具体的には、リモートセンシングとモデリングという国際的先端研究（もはや先端研究ではないが）を教えるからついてこいなどという思い上がった態度ではいけない。そんなこと覚えたって、せいぜい、地球温暖化ごっこに加われるだけだ。途上国にとっては意味がない。こうした背景を十分理解して、課題設定についても、実施において、現地に対するデリケートな配慮が必要なのだ。そういう意味では、チームメンバーの選定も重要である。